

他人の目より自分の心 —自分と正面から向き合える国・カナダ—

トロント補習授業校教員(元中学校教諭) 上野陽子

1 早起き社会

カナダの朝は早い。初夏から秋にかけては、シングルという屋根板を張り替えるトントンという音が、雪の季節には除雪車の音が、まだ暗いうちから朝を告げてくれる。スーパーマーケットは朝7時には開いているし、血液などの検査をしてもらう医療機関も、7時から受け付けてくれる。専門医の予約も7時台にとれるし、多くの大学の1時間目は8時か8時半に始まる。水道管や暖房の修理業者も、ビルの建設現場で働く人たちも、8時には仕事は佳境に入っている。これはどうやら、ヨーロッパの生活習慣が、今でも生きているためらしい。

当然、職場からの帰宅時刻も早く、学校も例外ではない。「子どもが学校に忘れ物をしたというので慌てて一緒に学校へ行って見たが、もう児童・生徒はもちろん、先生も誰一人いない！腕時計を見ると、まだ4時半過ぎである」という経験をした日本人の親は、私1人ではないようだ。「5時から男」などという言葉が日本にはあるようだが、カナダの「5時から」は、職場から離れて、別の人生が始まる時刻なのである。

インテリアのペイントはもちろん、キッチンやバスルームの改造、床板の張り替えから、広い裏庭の木製フェンス、大きな窓にはめられた見事なステンドグラス、時には、家そのものまで・・・カナダ人の「趣味の手作り」は、半端ではない。今でも根付いている教会の活動も、健康志向ブームにもあやかっただけのフィットネスクラブの大繁盛も、コミュニティサークルの人気も、ボランティアグループの旺盛な活動も、家族・家庭を大切にすることも、すべて一日の朝早いスタートが、大きく貢献していると言えるだろう。

2 大地が心のゆとり

1997年の春、カナダの大地を踏むのは、その時がはじめてであった。親類縁者は皆無。40代半ばの夫と私、高2の娘、小5の息子、一家4人の移民生活が始まった。地球規模の食糧危機の警鐘に対し、sustainable agriculture（持続可能な農業）を追求したいという夫に、ただついて来ただけの私である。

面積は日本の26倍、人口は日本の4分の1、人口密度にいたっては日本の110分の1の国である。その人口の大部分がアメリカとの国境沿いに集中しているとはいえ、やはり人間が圧倒的に少ない。これは「商売」には最悪の条件である。最初の2年間、人口200人の村の農場に住み、無農薬野菜を作っていた。農協などという便利なものなどないこの地では、作ったものは自力で売らなければならない。自宅の前に机を出して売ってみたり、ファーマーズマーケットのブースを借りたりしたが、とにかくお客さんが少ない。ファーマーズマーケットでは、売っている者同士がお互いに買い合ったり、分け合ったりして、何とも和やかで楽しいのだが、商売と言うにはあんまりな状況だった。

トロントのような大きな街のダウンタウンでもない限り、日本人感覚では、とにかく人が少ない。週末のスーパーマーケットでさえ、清潔で美しく整った広々とした店内で、家族そろってゆったりと買い物を楽しむことができるくらいである。

農場時代、最寄りの隣家は1kmも離れていた。ピアノの音を気にする必要もなければ、どんな格好で、何をしようと誰の目に触れることもない。他人との優劣比較など無意味だし、「世間」から遅れていないか、みんなと違ったことをしていないかなど、気かけようもない。実に気楽である。自分が心地よければ、それでいいのである。



週末のスーパーマーケットの店内の様子

カナダ政府の日本語サイトのトップに「当たり前人に人を大切にす国、回り道でいい、支えあえばいいカナダの暮らし」「隣同士でこんなに違う寛容と平等、非アメリカな価値観の国」という言葉がある。移民の国だから、「違いを認め、違いを受け入れ、違いを尊重して・・・」よく言われる言葉だ。要するに、何でもありということである。それぞれが、それぞれに一番いいと思うようにすればいいのだ。この精神は、カナダの国民とこの広大な大地に、その根を張っているように思う。

農場経営の2年間を経て、夫は再び勉強の道を選んだ。大学卒業後、4分の1世紀の空白時間を越えての大学院修士課程入学である。50歳すぎの学生誕生だ。が、話題になるでもなし、変な目で見られるわけでもない。もちろん「お歳だから」と甘えさせてなぞくれない。息子や娘と同年代の学生とチームを組んでディベートし、共同プロジェクトをこなす。宿題もテストも真剣勝負。現在も博士課程で勉強中だ。

3 大学は地域のアカデミックセンター

カナダの大学は、100%州立である。いわゆる入学試験はない。12年生（高3）の成績で大学の合否が決まる。大学や専攻によって異なるが、成績優秀生徒には、合格通知と一緒に奨学金（一時金）の価格が書かれている。たとえば、90%以上なら5000ドル、75%以上であれば1000ドルという風に。まさに現金と言うかなんと言うか。入学後も、毎年



大学での一般市民向けの催し物の様子

90%以上を維持すれば、授業料は奨学金で賄える。

大学生たちは実によく勉強する。前記の奨学金を始めとする様々な「賞」が動機とも言えるだろうが、それ以上に、成績次第で容赦なく落とされるからだ。理系の学部では、2年生に進級する学生数が入学者数の半分以下になることも珍しくない。入試があればそこで調整される高校間レベル格差が、ここで是正されるわけだ。では、大量の大学中退者が出るのか、というとそれは違う。学部を変えたり、大学を変えたりと「自分が一番心地よい場所」に移っていく。

大学のキャンパスには誰でも自由に入ることができる。老若男女を問わず、人種・国籍を問わず、とにかく千差万別の人が闊歩している。誰が学生で誰が教師なのか、誰が大学関係者で誰がそうでないのか、ほとんどわからない。そして、誰も気にしない。教授といえども、暑い日にはサンダルに半パン、Tシャツといういでたちである。

一般市民向けの催し物も年中行われる。「Free Organic Expo and Sampling Fair」なるものが、今、開催されている。有機栽培を知り、試食もできる催しだ。「市民大学講座」的な講演会もあるし、恒例の市民向けオープンハウスもある。

垣根を作らず地域に融合する大学は、その気になったら、いつでも受け入れてくれる大学本来の姿である。それは、いつでもやり直すことができる人生の象徴とは言えまいか。自分の心の声に耳を傾け、自分と正面から向き合える時間と空間がある国、それがカナダだ。